

靈藥と引き換えに師匠  
が  $\alpha$  の仙人へ差し出し  
たのは、自分が  $\Omega$  だと  
知らない美少年僧でし  
た

「あぐうっ♡ 変な場所を触るなぁ♡」

後ろから抱きかかえられている。背中当たる身体が細い。なのに腕はびくともしない。仙人の体温は人間より低く、銀灰の髪が頬に触れるたび、ひやりとした。指先だけが灼けるように熱い。

股の間の裂け目に長い指が沈んで、蓮慧は寝台の上でのたうち回る。

「まだ浅いな。……だが、確かにある」

耳のすぐ後ろで、低い声。静かで、感情のない声。なのに息が耳朶にかかるたび、背筋がぞくりと震える。

「ひううっ、ぐりぐり動かさないでええ♡」

逃げようと身を振る。細い腕に絡め取られて、背中がぴたりと張りついた。柔らかい髪が首筋にかかって、薬草の匂いがした。

指の腹が裂け目の中を探る。浅い溝をなぞり、柔らかい肉を押し拵げ、くちゅ♡ と音がした。

「やっ♡ な、なんの音……っ♡」

「おまえの身体が鳴っている」

顎に手が回った。軽く上を向かされ、横から覗き込まれる。翡翠色の目。人の顔をした、人でないものの目。蓮慧の崩れかけた顔を、静かに——けれど明るい目で見ている。

「……綺麗だな」

「ぬ、濡れて——っ♡♡」

見られている。この顔を。涙の滲んだ目を。至近距離で、あの翡翠色に映されている。

意味が分からない。何が起きているのか分からない。分かるのは、後ろから抱き締められて、知らない場所を弄られて、知らない声が喉から勝手に出てくるとのことだけ。

二日前まで、こんなもの——気づきもしなかった。

「ずっとあったものだ。おまえが知らなかっただけで」

「う、嘘だ……っ♡」

嘘だ。嘘でなければ困る。十三で山に入って、五年。毎朝、水を被り、毎晩、座禅を組んだ。おれの身体はおれが一番よく知っている——はずだった。

「嘘ではない。おまえの師匠も知っていた。——おれの薬湯で、ようやく育った」

「師匠が——」

声が掠れた。師匠の顔が浮かぶ。厳しくて、ぶっきらぼうで、でもおれを山登りに送り出すとき、背中をぽんと叩いてくれた、あの人が——知っていた？

指がまだ裂け目の中にある。動いている。考えようとしても、背中に張りつく冷たい身体と、耳にかかる息と、指の熱さが、頭を甘く痺れさせて、言葉がまとまらない。

「あっ♡♡ ま、待って……っ♡ 話の途中、で……っ♡♡」

「話しながらでもかまわない。——指は止めないが」

くちゅ♡ くちゅ♡ 指が裂け目の中でまた動いた。逃げるほど、細い腕の中に閉じ込められる。

裏返る声に呼応して、指が敏感な場所をこねてくる。くちゅ♡ くちゅ♡ 考えたいのに、濃密な水音に思考が溶かされる。

「おまえの身体には、男にはないものが眠っている」

「知って……る……っ♡♡ だから、それを——止めてくれる、って——っ♡♡」

「止める？ なぜ止める。——おまえの師匠からの文もある。『弟子の中に兆しのある子がいる。霊薬と引き換えに差し出す』ってさ」

濡れた指が引っ込んだ。

蓮慧の全身から力が抜ける。

「……………え？」

「取引だよ。おまえの師匠が、おれの霊薬を欲しがった。代わりにおまえを寄越した。——それだけの話だ」

庵の中が静寂に沈む。竈の薬湯がことこと煮える音だけが、やけに大きく響いた。

「嘘だ……師匠は、おれに、薬を持ち帰れって——」

「持ち帰る薬はない。おまえが薬だ」

低い声で玄朔が笑った。声を立てない、吐息だけの笑い。  
翡翠色の目が細まる。

「七日かけて山を登ってきたんだろう？ 足の血豆を潰して、  
師匠のために。——健気なものだな」

「黙れ……っ」

「おまえの師匠はその健気な弟子を、おれに売ったんだよ」

蓮慧の目から涙がこぼれた。怒りではない。もっと深い場所が、音もなく潰れた。

「……帰る」

「雲海から下る石段は沈んでいる。陽の昇るころまで諦めなさい」

「帰るッ……帰って、師匠に——」

「帰って、どうする？」

「——っ」

「用済みの材料を引き取る約束はしていない。おまえの居場所は、もうあの寺にはないよ」

いくら諭されても、蓮慧はむずがる子供のように厭々と首を振った。涙が飛ぶ。鼻の奥が詰まって、呼吸がぐちゃぐちゃになる。

十八の身体が、十三の子供に戻っていく。山に入る前の、何も知らない、誰かに守ってもらわなければ生きていけなかった頃の自分に。

「やだ……帰る……帰りたい……っ」

唇を噛もうとした——その瞬間、息を呑む。

頬を伝う涙を長い指で拭われた。冷たい指。仙人の指。その手が顎を持ち上げて——玄朔の唇が、重なっていた。

葉草の匂い。冷たい唇。なのに舌だけが熱い。

「ん——っ♡♡    ンン……っ♡♡」

声が塞がれる。抵抗も、拒絶も、帰りたいという願いも、全部——口の中に呑み込まれていく。

長い接吻だった。息ができなくて、涙が止まらなくて、それなのに唇が離れた瞬間——蓮慧の身体が、かすかに前に傾いた。追いかけるように。

すぐに元へ戻す。慌てて。けれど——玄朔は見ている。

「……行き場のない子供を拾うのは、嫌いではない」

玄朔の翡翠色の目が、至近距離で蓮慧を見つめている。

「おれの傍にいろ。悪いようにはしない」

それが嘘だと分かっている。分かっているのに——もう、あの山を降りる気力がない。

「まず、ここから教えてやる」

玄朔の手が蓮慧の黒髪を梳いた。肩にかかる髪が、冷たい指の間をさらさらと流れる。その手に導かれるまま、蓮慧は仰向けに寝かされた。黒い髪が寝台の上に散る。抵抗する力は残っていない。泣きすぎて、身体の芯がふやけている。

「美しいな。髪も、顔も。——可愛い男だ、おまえは」

「み、見るなあ……助平っ♡♡」

「好いた者の裸を見るのがおかしいか」

「僕は好いてなんか……うううっ」

大きな瞳を潤ませて、顔をそむける。もう、抵抗する力は残っていない。

僧衣の前を開かれる。白い肌に鎖骨が浮き、薄い胸に肋の影が走る。——その股の間に、玄朔の視線が降りた。

「やだ……見るな……っ♡」

「見ないでどうする。おれはこれから、おまえの身体を隅々まで知る」

膝を押し開かれた。力の入らない脚は簡単に開く。股の間に——裂け目。さっきまで指で弄られていた場所が、蓮慧自身の目にも見えた。

「っ……」

自分の目で見てしまった。あるのだと。本当に、あるのだと。

「泣くな。——泣くのは、もっと後でいい」

長い指が裂け目の表面にそっと触れた。

「ッ……う……っ♡」

声が出た。さっきと同じ、自分のものとは思えない細い声。背中を張り詰めた弦が弾かれたように、びくんと跳ねる。

「ここが裂け目の入口。まだ浅い。——だが、ここに」

指が少し上に滑った。小さな突起に触れる。

「ひぁっ♡♡」

腰が浮いた。さっきとは桁が違う衝撃。

「——クリトリスがある。おまえの身体に出来た、一番敏感な場所だ」

「知りたく——ないっ♡♡ そんな名前——っ♡♡」

「知らなくても身体は反応する。——ほら」

指先が突起をゆっくり転がした。

くり♡    くり♡

「やっ♡♡ やめっ♡♡ そこ——っ♡♡ 何か——変なっ——♡♡」

「変ではない。正しい反応だ」

蓮慧の手が玄朔の手首を掴んだ。止めようとして——止められない。掴んだ手が震えているだけ。

「離、せて……っ♡♡ 僕は男だ……っ♡♡ 男がこんな場所でっ——♡♡」

「男の身体にあるものだ。おまえだけの器官だ。——可愛い男の、可愛い場所だ」

くりくり♡    くり♡    くりくり♡

指の腹が突起を捏ね回す。小さな円を描くように。蓮慧の背中が弓のように反った。



「おっ♡♡ おっ♡♡ ンッ♡♡ やだっ♡♡ 頭がっ——  
おかしくっ——なるっ♡♡」

「おかしくなどならない。感じているだけだ」

玄朔の空いた手が蓮慧の頬に触れた。涙を拭うように。冷たい指が濡れた頬をなぞる。

「いい顔だ。——泣きながら感じている顔は」

「見るなっ♡♡ 見るなっ♡♡」

首を振る。振っても玄朔の目は逸れない。翡翠色の目が蓮慧の顔を映し続ける。崩れていく顔を。一つ残らず。

くちゅ♡ 指がクリトリスから離れ、裂け目の奥へ滑った。

「ひっ……♡♡」

入口に指先が当たる。浅い。狭い。ようやく育ち始めたばかりの器官。

「入れるぞ」

「待っ——♡♡」

待たなかった。

じゅぷ♡

一本。ゆっくりと。蓮慧の中に指が沈んでいく。

「おお……っ♡♡♡ 中……っ♡♡ 入って……くる……っ♡♡」

「きつい。——だが、ちゃんと受け入れている」

内壁が指を締めつけた。きゅう♡ と。拒んでいるのか、  
咥え込んでいるのか、蓮慧自身にも分からない。

ずちゅ♡ ずちゅ♡

「やあっ♡♡ 中、掻き回すな……っ♡♡ 出して……っ  
♡♡」

「出してほしいか？」

「……っ♡♡」

「ならば——ここは？」

指が奥を探る。浅い内壁の一番深いところを、指先がそっ  
と擦った。

「ジッ♡♡♡」

蓮慧の全身が跳ねた。今までとは質の違う衝撃。腹の奥を  
雷が貫いたような。

「ここだ。——子宮口。おまえの中に、ちゃんと子宮が出来  
かけている」

「子宮……っ♡♡」

目が見開かれる。男の身体に——子宮。

「やだ……っ♡♡ そんなもの——僕の中に——っ♡♡」

「嫌がっても、ここが一番反応している」

くにくに♡ 指先が子宮口を撫で回す。蓮慧の腰がびくび  
くと痙攣した。

「おっ♡♡ おっ♡♡ おあっ♡♡ やめっ♡♡ 奥——っ♡♡ 何かっ——滲んで——っ♡♡」

「靈液だ。おまえが感じて、蕩けて、身体の奥から滲み出たもの。——これが、おれの欲しいものだ」

指を引き抜く。長い指先に、透明な糸が引いていた。

「……まだ薄い」

玄朔が指先を光に透かした。微かに虹色を帯びた液体。

「もっと深く堕ちなければ使い物にならない」

蓮慧は天井を見つめた。涙でぼやけた視界に、粗末な板張りとは葉草の棚が揺れている。

身体の奥が、まだ疼いている。指が抜かれたのに。——むしろ抜かれたから、余計に。

（やめろ……っ♡♡ 疼くな……っ♡♡ こんな身体——僕の身体じゃ——っ♡♡）

僕の身体じゃない。そう思ったかった。けれど疼きは蓮慧のもので、快感の残響も蓮慧のもので、涙も、震えも、全部——自分のものだった。

未知の鼓動に翻弄されているさなか、庵の外で人間ではない気配を感じた。

板壁を何かが引っ掻く音が、ぎぎぎ、と響く。

「……山鬼か」

不機嫌そうに玄朔は表情を変えた。翡翠色の目から色が消え、仙人の顔になる。蓮慧の身体から手が離れた。

「そこを動くなよ」

一言残して、庵の戸を開ける。静寂を乱さぬ彼の足取りに、蓮慧は息を呑んだ。音がない。足が地に触れていないかのよう。

寝台の上に取り残された蓮慧は、僧衣を乱したまま内股を閉じた。股の間がまだ濡れて、熱い。玄朔の指の感触が消えない。

庵の外から低い詠唱が聞こえた。獣の悲鳴がこだまし、気配は遠ざかっていく。

「んっ♡♡ なにこれっ♡ うっ……」

詠唱の直後、鋭い痺れが内股からお腹へとほとばしった。身体の奥が、脈打つように疼く。玄朔の声に——身体が反応している。

蓮慧は自分の手を見た。震えている。

(触るな)

自分に言い聞かせる。

(確かめるな)

だが——閉じたはずの脚を、開いていた。

いつ開いたのか分からない。身体が勝手に。玄朔の指を受け入れていた姿勢に、自分から戻ろうとしている。

恐る恐る、指を伸ばす。裂け目に、触れた。

「——っ♡」

ある。本当にある。指先に柔らかい肉の感触。自分の身体の熱が、自分の指に直接伝わる。

(やめろ……確かめるな……)

触れた瞬間、知らない感覚が背筋を這い上がった。甘い。痺れるような——玄朔の指で触られた時と同じ、けれどももっと生々しい。自分の指だから。

身体が覚えている。さっき教え込まれた快感の道筋を、指がなぞろうとする。

「あ……っ♡♡」

思わず力を入れてしまった。声にならない声が漏れた。慌てて手を引く。指先が——微かに、濡れている。

(僕は——今、何を——)

蓮慧は濡れた指先を見つめた。透明な、かすかに光を帯びた液体。霊液。自分の身体から滲み出たもの。

男の身体ではあるものの、何かが変わっていることに蓮慧自身は気づいていない。閉じた脚を自分で開いたことも。指が迷わず裂け目に伸びたことも。声が——さっきより高くなっていることも。

蓮慧が慌てて指を僧衣で拭いた時——庵の戸が開いた。

玄朔が戻る。翡翠色の目が蓮慧を捉え——指先に、一瞬だけ視線が止まった。

「自分で触ったか」

「……触ってない」

「嘘が下手だな」

声が低い。けれど——怒ってはいない。不機嫌だった表情が消えて、代わりに浮かんだのは——言葉にし難い、熱を帯びた目。

玄朔が寝台の傍に膝をついた。距離が一気に縮まる。銀灰の髪が蓮慧の頬に触れるほど近い。

「初めて触った感想は？」

蓮慧は顔を背ける。答えない。答えられるはずがない。

「——気持ちよかっただろう」

「っ……♡♡」

凶星を突かれて、肩が跳ねた。

玄朔は答えを待たなかった。蓮慧の両手首を片手で掴み、頭の上に押さえつける。細い手なのに凄まじく強い。

「もう離さない」

低い声。静かな声。なのに——その奥に、さっきまでなかったものが混ざっている。

「っ……離せ……♡♡」

「おまえが自分で触れたことで、身体が目覚めた。さっきより遥かに敏感になっている」

「なって——ないっ♡♡」

嘘だった。分かっていた。玄朔の指がまだ触れてもいないのに、裂け目の辺りが熱い。自分で触れてしまったことが——何かの蓋を開けた。

(やめろ……っ♡♡ 気づくな……っ♡♡ 身体が——勝手に——熱くなるな——っ♡♡)

「確かめてやる」

玄朔の左手が蓮慧の両手首を押さえたまま、右手がゆっくりと降りてくる。胸を素通りし、腹を撫で、下腹部を越え

---

裂け目に触れた。

「ひっ……♡♡」

びく、と全身が跳ねる。さっきより明らかに大きな反応。自分でも分かる。

「……ほう」

玄朔の目が細くなった。

指の腹が裂け目の表面を撫でる。上から下へ。ゆっくりと。

くちゅ♡ くちゅ♡ くちゅ♡

「っあ……♡♡ う、ん……っ♡♡ やめ……っ♡♡」